

シンチは同部位の集積亢進を示した。また、骨シンチ上、肋骨に淡い集積と胸骨、胸椎、大腿骨に欠損像を呈した1例において^{99m}Tc-HM-PAOは全部位に異常集積を示した。また、骨シンチグラフィ上、肋骨、骨盤、大腿骨に欠損を呈した3例においても^{99m}Tc-HM-PAOは集積亢進を呈した。肝細胞癌の骨転移では骨シンチグラフィ上のcold lesionにも注意を払い、また^{99m}Tc-HM-PAOシンチグラフィの併用も有用であることが示唆された。

4. 骨軟骨腫瘍の骨シンチグラフィの特徴的所見の検討

米城 秀 菅 一能 藤田 岳史
 河田 陽子 有田 剛 中西 敬
 (山口大・放)
 宇津見博基 山田 典将 (同・放部)
 橋山 敬 (国立湯田温泉病院・放)

原発性骨軟骨腫瘍23例に対し、^{99m}Tc-HMDPシンチグラフィを行い、特徴的所見の有無について検討した。集積度については、悪性度の高いものに集積が強く見られたが、悪性でも集積の見られないものがあり(多発性骨髄腫、脊索腫)、良性でも集積のあるものが多く、良悪の鑑別は困難であると考えられた。リング状集積は、骨肉腫8例中6例、内軟骨腫2例中1例、巨細胞腫1例中1例に見られた。Extended-patternは骨肉腫のみで見られた。

5. 骨転移放射線治療前後の骨シンチグラム所見の検討

木内 孝明 三谷 昌弘 細川 敦之
 川崎 幸子 佐藤 功 高島 均
 田邊 正忠 (香川医大・放)

過去4年間の骨転移放射線治療施行64例のうち骨シンチグラムで経過観察された18例32部位の骨シンチグラムと、単純X線写真の経時的变化を除痛効果の有無により分類し検討した。除痛効果のみられた有効14症例、26部位のうち、flare phenomenonが42%に見られた。集積減少は4~6か月後が最も多く70%であった。単純X線写真では、溶骨像から硬化像に変化したもののが29%であり、放治前に硬化像や正常の場合には、X線写真上変化がみられなかった。痛みが増強した無効例は4症例6部位と少ないが、骨シンチグラムでは集積は増

強し、単純X線写真では溶骨性変化が進行する傾向がみられた。

6. 転移性椎体腫瘍のMRIと骨シンチグラフィ

—組織所見との対比—

吉廻 豊 内田 伸恵 梶谷 明子
 杉村 和朗 石田 哲哉 (島根医大・放)

生検または剖検によって組織学的に確認された腫瘍型成型の転移3症例18椎体と、びまん型の転移3症例22椎体のMRIと骨シンチグラフィの病巣検出能を比較した。MRIの病巣検出率はいずれのpulse sequenceにおいても100%であった。骨シンチの検出率は両型とも有意に低く、特にびまん型転移では18%と極端であった。これは骨シンチが骨代謝の亢進を反映するためかもしれない。一方、MRIは骨成分の変化は描出できないが、腫瘍細胞の増殖による骨髄の変化を画像上信号の変化として示す。したがって、骨皮質に変化をきたさない、骨髄へのびまん性転移が疑われる場合には、骨シンチにMRIを併用することが必要である。

7. ¹²³I-IMPによる肝細胞癌骨転移巣の検出能の検討

岩宮 孝司 谷川 昇 周藤 裕治
 遠藤 健一 西尾 剛 水川帰一郎
 澤田 敏 太田 吉雄 (鳥取大・放)
 謝花 正信 (松江市立病院・放)

転移巣を有する肝細胞癌症例に対して¹²³I-IMPシンチグラフィを行い、転移巣の検出能に関して検討を行った。対象は骨転移3例、脳転移1例、肺転移3例、副腎転移1例、縦隔リンパ節転移1例である。方法は¹²³I-IMP 111 MBq 静注3時間後、臥位にてスポット撮影を行った。なお、脳転移例では静注30分後よりSPECTによる撮像を行った。骨転移の検出は良好で、骨外進展の把握にも有用であった。副腎転移、縦隔リンパ節転移にも集積を認めたがSPECTが望ましいと考えられた。肺転移には集積を認めず、撮像時間の検討が必要と考えられた。